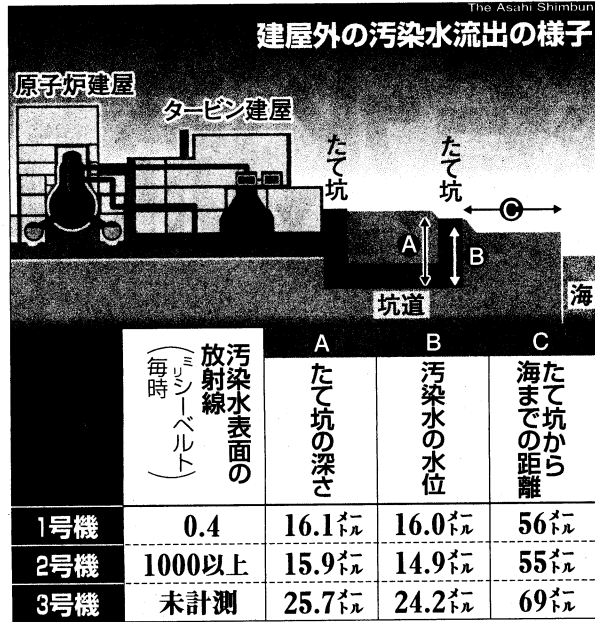


# 汚染水、建屋外に

## 高濃度放射能 地下坑道通じ

東日本大震災で被害を受けた福島第一原発で、東京電力は28日、2号機のタービン建屋から外へつながる坑道とたて坑にたまった水から、毎時1千リットル以上の放射線が測定されたことを明らかにした。放射線の成分は不明だが、建屋地下で見つかったものと同じ水とみられる。原子力安全委員会は28日夜の記者会見で、この水が海に漏れている可能性もあるとして、原発の沖合の海水を調べる地点を増やして監視を強める。

### 海に漏れた可能性も 安全委指摘



東電によると、1〜3号機でタービン建屋から外につながるたて坑と坑道に水がたまっているのを見つけた。2号機の場合、たて坑は深さ15.9メートル、坑道は長さ76メートル、容積は6000立方メートルだった。タービン建屋までは、放射線を厳格に管理する放射線管理区域だが、坑道は区域外。坑道には冷却用の海水をくみ上げて熱交換器に送る配管などが通っている。たて坑の出口から1メートルのところまで汚染水が上がってきており、水の表面の放射線量は毎時1千リットルを超えた。

たて坑の出口から海までは約55メートル。海にもれた跡は確認できないというが、坑道には継ぎ目があり、防水加工は完全ではないという。2号機では、タービン建屋内でも、高濃度の汚染水が見つかったという。東電は建屋と坑道の間で水が行き来しているともみている。

1、3号機の線量は、1号機が水表面で毎時0.4ミリシーベルト、3号機は空間の線量で毎時0.8ミリシーベルトだった。タービン建屋内の汚染の傾向を反映した数値になっており、いずれも坑道と建屋内の水はつながっていると見られる。

東電の武藤栄副社長は26日特別地域を決めたのは、從

の会見で、タービン建屋の地下で汚染水が見つかったことについて、「(放射線管理区域から)外に出て行く経路というのは設計上造っていない」と説明していた。

原子力安全委員会の班目春樹委員長は「正直、大変な驚き。憂慮している」と話し、土壌や海水の汚染を引き起こす可能性もあると言及。だが、「このような形で処理できるか知識を持ち合わせていない。原子力安全保安院で指導していただきたい」と話した。

東電は対策として、タービン建屋の水抜きを考えている。つながっている可能性が高いところを抜けば、坑道やたて坑の方の水位も下がるかもしれないという。

燃料を冷やすために原子炉に注水しなければならぬ。注水を続けられ、建屋地下や坑道への水の漏れが続くことになる。あふれた水を復水器に戻そうとしているものの、2号機では復水器が満杯。3号機も容量に問題があり、排水作業は難航している。

また、汚染水が放射線管理区域外で見つかったことについて、東電の武藤副社長は28日夜の会見で「情報は28日午後1時に聞いた」と述べ、異常に気づいてから1日経ってから報告を受けたことを明らかにした。